研究室紹介

新潟県農業総合研究所 中山間地農業技術センター

新潟県のイメージとしては広大な水田地帯を思い浮かべる方が多いと思われるが，実際は中山間地域の総面積が県土の約7割，耕地面積では約4割を占めていて，中山間地域の農業振興は重要課題になっている。当センターは中山間地農業を支援するための研究機関として，平成6年に蚕業試験場を大幅に改組して生まれた。魚沼地域の北端，旧川口町（現在の長岡市川口地区）にあり，標高は130 m程度で，夏季の気温は平坦地並みに高い。一方，積雪は多く，平年の最深積雪は約2 m，根雪期間は長く4月中下旬までである。「地域資源の有効活用による中山間地域農業生産技術の確立と農村活性化」を基本方針として，研究員3人体制で，地域ニーズに対応した山菜等の特産作物の研究を進めている。

現在の主な試験作物は，タラノメ，フキノトウ，ウルイ等の山菜，カグラナンバンやカリフラワーなどの特産野菜，ユリ切り花や草花類，薬用植物など多岐にわたる。過去には，ブルーベリーやイチジクなどの果樹，ヒメイワダレソウなどのカバープランツの研究に取り組んだ実績もある。新たな品目，品種の選定や栽培技術の研究が主であり，病害虫の研究実績はこれまでほぼなかったが，近年は現場で問題になっている病害の防除対策に関わる研究にも取り組んでいる。センターの研究員の技術や設備では不足するところは農業総合研究所の他部署の協力を得ながら進めている。二つの病害研究を中心に紹介する。

1　カグラナンバンの青枯病対策

カグラナンバン（図-1）は長岡市山古志地区で古くから栽培されてきた在来の唐辛子で，現在は魚沼地域や上越地域でも栽培されている。果実はピーマンより少し太ったころっとした形で，肉厚で爽やかな辛みが特徴である。生鮮野菜としての販売のほか，南蛮みそなどの加工品としても販売されている。このカグラナンバンでは以前から青枯病が発生し問題になっていた。その対策として，これまでに，養液栽培技術，抵抗性台木の利用効果等を明らかにしてきている。現在は，転炉スラグを用いた土壌pH矯正による被害低減技術に取り組んでいる。

図-1　カグラナンバン果実

図-2　タラノメふかし栽培の様子

2　タラノキの立枯疫病対策

魚沼地域では「タラノメ」のふかし栽培（図-2）が盛んで，その穂木を得るためのタラノキの栽培で立枯症状が問題になっている。この症状は*Phytophthora cactorum*よる立枯疫病であることを確認し，薬剤防除としてアゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤の土壌表面施用が有効であることを明らかにしている。

3　栽培技術等の研究

その他に取り組んでいる主な研究は，特産作物の新たな栽培技術や作型開発，中山間地域の気象条件や土地条件に合う品目，品種の選定である。具体的には，フキノトウやウルイの促成栽培技術や薬用植物トウキの栽培技術，カリフラワーの有望品種の選定，ユリ切り花の生理障害対策や開花期予測などがある。

今後も，中山間地域の農業を技術面から支援するため，地域資源を生かした特産作物等の技術開発を進めて行きたい。

（センター長　石本万寿広）

〒949-7505　新潟県長岡市川口牛ケ島135-1
TEL　0258-89-2330

植物防疫